

戀愛台風

目次

出会は突然	5
フリダシに戻る	47
ハロウインの憂鬱	131
素知らぬところで鐘は鳴る	245
緩やかな衝動	273

出会いは突然

鈴は目をすった。鏡の前で何度も何度も。それなのに次々溢れる涙にいつそ腹さえ立つてくる。「別に傷ついてないんだから……！」

張り上げた声が脱衣所で響いて、まるでやまびこのように跳ね返り、鈴はまた情けなくなつて泣いた。

原田鈴、二十四歳、——本日彼氏と別れました。

翌日は、普段であれば心躍る金曜日。厚めの化粧で出社した鈴は朝からブルーだった。あれだけ泣いたのだから当然だろう。傷ついてないなんて言葉はただの強がり、身も心もボロボロだ。

資料室にこもりコピーを取りながらも、拭い去れない疲労感に思わず肘をついてしまう。クセのあるショートボブの髪を指先でいじりながら、ガシャン、ガシャンと一定のリズムで排出される紙を無心で眺める。出てくるのは溜息ばかりだ。鈴は標準よりもずっと小さい体をコピー機に預けるようにして顔を伏せる。

鈴は男運がない。昔からそうだ。気が付けば自分の隣には典型的なダメ男がいる。それは、鈴の面倒見がいい性格に起因していた。

仕組みはこうだ。

ちょっと難がある男性に特に他意なく親切にする。相手が喜んでくれることが嬉しくて、当然のようにまた親切を繰り返す。すると誤解が生じ、ある日突然襲われる。

別に相手が嫌いなわけでもないが、そんな関係になるつもりもないので必死で抵抗し、逃げようとする。ところが、頼りなかった男たちはここぞとばかりに強かった。

そして、「その気にさせておいて今更なんだ、俺に恥かかせるのか」と激高されてしまうと、何も言えなくなってしまう。そのままズルズルと関係を持ち、泥沼化していくのだ。

しかも、付き合うからには相手を好きになろうと努力し、何とか「自分たちは恋人同士なんだ」と意識できたところで相手に新しい女ができる。

今回だってそうだ。年は一つ上だけ、ズボラで自分では何もしない男だった。知り合いを通じて出会ったのだが、世話を焼くうちに、いつものパターンに陥った。仕方なく付き合い始めたが、案の定、女を作られ破局。

切ないのは、今回の彼氏は金遣いが荒かったこと。いつか返すから、返すからと繰り返し、実際に返してくれた金額はゼロだ。

流石に腹が立った鈴が別れ間際に「貸したお金は返してよー」と叫べば、「浅ましい女だな」と返された。あまりの言いぐさに呆然とし、絶句している間に彼は逃げ、それっきり。

しかも金だけではない。今回一番シヨックだったのは――

「……原田さん、コピー、終わってるみたいだけど？」

グルグルと回る思考に制止をかけたのは男の声。鈴は現実引き戻され、ギョツとして顔を上げる。「さつきから顔色が優れないけど、大丈夫？」

そう言つて、高い背を屈め、シンプルな銀縁眼鏡の奥から気遣うような眼差しを向けてきたのは、別部署に所属する本村武雄だった。

鈴は彼の顔をポカンと見つめてから、いつの間にか終わっていた自分のコピーを確認し、さらには彼の手の中にある、おそらく今からコピーするつもりだろう書類を認識する。

「ず、すみません！」

鈴はコピー機についていた肘と曲がついていた膝を慌てて伸ばし、刷り上がった書類を胸に抱きかえた。顔を赤らめながら彼に背中を見せた鈴に「あ、ちょっと待つて」と制止の声がかかる。

振り返ると彼は笑つて、

「これ、入れたままだよ？ はい」

と、入れっぱなしだった原本を渡してきた。

鈴はそれを受け取り、「すみません！」ともう一度叫んで頭を下げる。そのまま、相手の顔をまともに見ることもできず、逃げるように資料室から立ち去つた。

「コピー遅えつての！」

「だったら城崎係長が自分で行つてくださいよ！」

部署に戻ると、直属の上司、城崎隼人からの怒声が響く。そんな彼に生意気にも言い返すと、周りの人間が凍り付いた。

どちらかと言えば気弱でのんびり屋な鈴が上司相手に声を荒らげるのにはわけがある。

実は鈴と城崎は、もう二十年以上も付き合ひがある幼なじみなのだ。年は城崎が五歳上の二十九歳。何の因果か同じ会社の同じ部署に所属することになった二人は、気が知れている分、喧嘩でもしているような会話になってしまう。

「……コラコラ、喧嘩はやめなさい」

睨み合う二人を諫めるような穏やかな声が響いて、鈴も城崎も言葉を呑み込んだ。

「佐野課長……」

共通の上司の登場に、体を前倒しにしていた二人も力を抜く。

「特に城崎君、落ちついて。親しい間柄で口調が強くなるのはわかるけど、君が怒つたら周りが怖がつて仕事できないから」

流石にばつが悪かったのか、城崎が頭を掻いて「すみません」と謝つた。鈴も続くように頭を下げる。

そして、お互いそれぞれの仕事に戻ろうとしたのだが、城崎が「おい、原田」と呼び止めてきた。

「書類の原本ねーぞ」

「ありませんか？」

「ねえから言つてんだけど。コピー機の中に入れてっぱなしじゃねーのか」

原本は、資料室で本村がわざわざ手渡してくれたので、置き忘れの可能性はない。まさかどこかに落としたのだろうか。

血の気が引いたところで、「ああ、いたいた」と背後から声が聞こえてきた。

「あれ、本村主任じゃないですか」

先に気付いたのは城崎。つられるように鈴も視線を送る。そこには書類を脇に抱え、手に何か別の用紙を持った本村の姿があった。

「原田さん、これ落ちてたよ」

そう言っただけ渡されたのは今まさに城崎が言っていた原本で、鈴は思わず「わっ」と叫ぶ。

「す、すみません！ さっきも取っもらったのに、その上落とすなんて」

「ああ、いや、いいんだ。それじゃあね」

本村は気さくな笑顔を崩さないまま、軽く手を上げて去っていった。

背後から城崎の冷たい視線が突き刺さる。それを見るのが嫌で、鈴は彼に背を向けたまま本村が持ってきてくれた原本を見下ろした。

2

鈴が勤めている会社は幅広い年齢層を対象にした教育教材を販売している。社名を言えば「ああ、

あの！」と言われる程度の知名度はある企業だ。

しかも鈴の所属は花形営業部、在籍二年目。

そんなところに一流大学出でも、特別いい成績でもない鈴が入れたのは、幼なじみでもあり若いながらも係長に抜擢された城崎の計らいである。いわゆるコネクションだ。城崎当人は手を貸したつもりはないと言っているが、自分が入社できた理由がそれ以外に考えられない。

学歴の差を痛感させられる毎日で、自分のデキの悪さには涙が出る。ただ、努力と気遣いだけは誰にも負けない鈴は、営業部の中でも成績はいい方だった。顧客ニーズを掴むことにも長け、その点は他の同僚たちにも認められている。ただ、お人好しな性格故に情に流されやすいのが難点で、お目付役の城崎と仕事を組まされることが多かった。

一方、口論ばかりの幼なじみ、城崎は、容姿端麗、成績優秀。常に自信に満ち溢れている恵まれた存在だが、時に口がきつく、人への配慮に欠けることがある。だから、デコボコな二人が組むことで自分にはないものを互いに補い合っていた。

そして、今書類を届けてくれたのは、人事部で働く本村武雄だ。確か今年で三十三歳。銀縁の眼鏡の奥にはいつも穏やかな眼差しがあり、物腰も柔らか。常に知的な雰囲気漂っている。男なのに役職を嫌う変わり者だが、彼と親しく、また大学の後輩でもある佐藤大輔が、本村の上司として効率的に本村を動かしているため、彼が察際に追いやられることはないらしい。

ただ、日陰族に属する本村に対して城崎は「本村さんはもつと上を狙える人なのにもつたいねえなあ」と評していた。

人事部には鈴の同期で親しい友人でもある基山知子という女性もいるのだが、彼女も時折本村を話題に上げ、「真面目でどんな仕事でもきちんと時間内に終わらせる、できる男」となかなかの高評価だ。

城崎にしても、基山にしても、滅多に人を褒めないのでそのことは鈴の頭に残り、「本村さんは物静かだけど実はできる人」とインプットされている。

しかし、部署が違う上に九歳も年上なので、特に関わることもないだろう。向こうも、自分なんか興味ないだろうし、と鈴は考えていた。

「そういうや原田、お前、男と別れたんだって？」

その日の昼休み、社員食堂で牛丼を頼んだ城崎の正面に腰かけ、昨日フラれたショックで白米と卵焼きしかない自作の弁当を食べていた鈴は、直球な話題に思わず口にしていたものを嘔き出した。「うわ、きつたねえな！」

「だって隼人にいが急に变なこと言うから！」

「社内じゃ城崎『係長』って呼べ！俺だって職場で『鈴』とは呼んでねえだろうが。気をつける馬鹿』反射的に昔から馴染んだ呼び名を口にする、城崎が咎めるように言ってくる。鈴が、「城崎『係長様！』が変なこと言うから」と反抗的に言い直せば、彼は大きく息を吐いた。

「さっき、加藤から電話来たんだけど、お前、別れた男に、『鈴が金返せて泣き叫びながら包丁振り回して警察沙汰になった』とか言われてるらしいぞ」

今度は唾液を呑み間違えて咽せ込む。

加藤は、城崎の高校時代の後輩で、基山の彼氏でもある男だ。実は、昨日別れた彼氏と鈴が出会うきっかけを作ってしまったのがこの加藤である。彼らは同じ運送会社に勤めていたのだ。

「そんなのデタラメだよ！」

「わーってるよ。相手の男は加藤がシメたって言ってたけど、懲りてはないようだな。加藤の奴、お前に申し訳ないって謝ってたぜ」

元彼の難癖を知っていた加藤は、鈴と引き合わせてしまったことを悔やんで何度も詫びを入れてきていた。

鈴が、自分が流されたのが悪いんですと言ってても表情を曇らせていた彼だが、別れた上にこんな嘘までバラまく元彼の姿に、再び落ち込んでいるだろう。

「今日は化粧濃いし……昨日派手に泣いたんだろ？　ったく……大丈夫か？」

鈴に対しては常に粗暴な態度をとる城崎も、いざというときには優しい。それが心の傷口に染みこみ、鈴は顔を伏せた。

これ以上何か言えば鈴がまた泣いてしまうと判断したのか、城崎は鈴の頭をポンと叩いて、「もうちつといい男見つけろよ、いい加減。ま、愚痴なら聞いてやっから、どうしようもなくなったら頼ってこい」

と話を切り上げた。そして、空になった食器を手を立ち上がり、「んじゃ、俺、先に営業部戻っから」と去っていく。

いつそ城崎のような男と付き合えば幸せになれるのだろうか。しかし、二十年以上も付き合っている兄妹同然の自分たちが、恋人同士になんてなれるはずがない。第一、向こうも鈴なんか願わがげだろう。

「あー……、もうやだなあ……」

城崎の励ましは嬉しかったが、一人になると、考えてしまうのはやはり元彼のこと。

言われた言葉をいちいち思い出してしまつて、鈴は箸を握りしめたままテーブルに上半身を伏せた。憂鬱が背中に張り付いているようで重い。

そのまま、意味もなく腕に額を押しつけて首を振っていると、

「……原田さん、大丈夫？」

と頭上から声が落ちてきた。

このシチュエーションには覚えがあると思つて顔を上げると、そこには鈴にコピーの原本を届けしてくれた本村の姿。綺麗にセットされた髪が、体を屈めたせいで幾筋か垂れ、揺れている。

「本村主任……」

「席空いてる？」

見れば手には食事の載つたトレイ。鈴が頷くと彼は「ありがとう」と言つて正面に腰かけた。しかし、どうして急に話しかけてきたのだろう。

何を話しているのかわからず口ごもる鈴に、

「何かあつたの？」

と、食事を口に運びながら本村が尋ねてくる。

「え」

「元気がないから」

自分は普段話さない人から見ても元気がなさそうな顔をしていたのだろうか。何だか情けなくなつて、箸を置くとぎゅつと服を握りしめた。

「あ、ごめん、急に变なことを聞いて……」

その態度に本村が焦つたように声を上げる。鈴は首を振り、「私が未熟なんです」と口早に言つた。「じ、実は彼氏と昨日別れて……結構酷い言い合いになつたものだから尾を引いちゃつて、仕事にまで持ち込んだんじやつたんです……」

下手に嘘をつくのも憚られ、素直に白状する。話すことで、かえつて気まずい思いをさせたんじゃないかと不安になつたが、

「……彼のこと好きだったのかい？」

と、尋ねる彼の声はどこまでも優しくかつた。

「いいえー」

「……え」

雰囲気をぶち壊すように即答した鈴に、本村の方が驚く。遅れて鈴当人も驚き慌てて口を押さえたが、きつとこれが本音なのだろう。鈴はまた情けなくなつて、テーブルに突つ伏した。

「は、原田さん？」

「すみません、今、自己嫌悪で」
付き合っているのだから好きになろうと思っていたけれど、そんな都合良くいくはずがない。そもそも無理して好きになろうという時点で間違っていたのだ。

しばらくたって、本村が腕時計を確認しているのを気配で感じ取った鈴は、別部署とはいえ上司の本村を待ちぼうけにさせてしまったことに気付いて血の気が引いた。社員食堂備え付けの時計を見ると、もう休憩時間終了直前。

「わ、ど、どうしよう、私……！」

最初の一口分しか減っていない、本村の冷めた食事。彼は、突然別れ話を打ち明け、一人でへこみ、黙り込んでしまった鈴の様子を、食事も取らずに見守っていたようだ。

自分のあまりの失礼さに鈴はパニックになってしまい、反射的に立ち上がる。

その手を本村が掴んだ。

「すみません、すみません！ 本当にごめんなさ……」

「続きは仕事が終わったら聞こうか？ 君さえ良ければだけど」

本来なら、怒られてもいい粗相をしている。それなのに、彼はいつもの穏やかな笑みを浮かべて自分を見ているのだ。

この人はどこまでいい人なのだろう。今まで鈴が付き合ってきた男たちは、自己本位で何でも好き勝手にしてしまう我が儘な人間ばかりだったから、その優しさに鈴は感動するよりも啞然としてしまった。

「そんな、悪いです……」

「でも、何かわけありみたいだし、俺としても話を聞かせてもらわないと後味悪いというか」

本村の言葉はもつともだった。こんな中途半端に激しい感情だけ見せられたところでわけがわからないだろう。事情だって知りたくなるに違いない。

鈴は少し悩んでから、「迷惑じゃないですか？」と小声で尋ねる。彼は真面目な表情で「迷惑じゃないよ」と頷いた。

(どうしよう)

今更言っても説得力がないだろうが、人に迷惑をかけるのは好きじゃない。何より親しくもない相手にべらべらとプライベートを語るのは憚られる。

ただ、その真剣な眼差しを拒むことができなくて、鈴も同じように頷いた。すると、本村は安心したように笑う。

自分よりも九歳年上の本村がはにかむように笑う姿は、鈴の心を妙にくすぐった。

仕事終わりの十七時十五分。

『仕事が終わったら携帯にかけて』

そう言って渡された電話番号入りの名刺。鈴はそれを見つめて、緊張しながら電話をかけた。

『原田さん？』

かかると同時に名前を呼ばれる。緊張して、「あ、あのお」と声を上擦らせながらも、

「今終わりました。どうしたらいいでしょうか？」
と言った。

『俺もあと五分ちよつとで終わるから、ロビーで待っていてもらっていいかな』
「わかりました。あの、急がなくて大丈夫ですから。無理されなくてください」
『……ありがとう』

携帯を胸に押しつけながら一息つく。ガラスに映った自分の顔に盛大な溜息。傷心が顔に現れ、いくら厚化粧をしたところで顔のむくみも隠せない。まともに会話をしたこともない、別部署の上司と初めて出かけるのに、この顔はどうなのだと心の中で呟く。

(別にデートするわけでもないし)

そう思いながらもやはりガラスの前に立つと顔を確認してしまうのは女の性さがだろうか。
それから十分ほどして、足早にこちらに向かってくる本村に気が付いた。

「ゴメン、自分から誘っておいて遅れるだなんて」

「こつちが付き合わせてるんですから！ 謝ったりしないでください」

謝罪に首を振り、必死で言えば彼は一拍あけてにこりと笑う。

鈴は思う。この人は大人の笑顔を見せるなあ、と。

「車出せるから遠出もできるよ。幸い明日は土曜だし。どこがいい？ 何か食べたいものある？」
これだけ年が離れている人と二人きりで出かけることが少ない鈴は、どんな場所がいいか首を傾げて考え込んだが、いい場所が思いつかない。それに、下手な場所を指定して呆れられるのも怖か

った。

「あの、本村主任のお好きな場所がいいです」

「え、俺の？ 俺、居酒屋しか知らないんだ」

「いいですよ、それでも」

「でも原田さんお酒飲めないんじゃないっけ？」

確かに鈴はアルコールが苦手だった。嫌いなわけではないのだが、少量飲んだだけで周りが引くくらい悪酔いしてしまうのだ。ただそれを本村に話した記憶はない。どうして知っているのだろうかと考えたところで、人事部で働く友人、基山の姿が思い浮かぶ。おそらく彼女が何かの拍子に話したのだろう。

「でも私、居酒屋さんの雰囲気とか食事とか嫌いじゃないです」

「えっと、じゃあ、行きつけの店でいいかな？ 本当に居酒屋だよ。うるさいし。それでもいい？」

「かえってそつちが気楽です」

鈴の返答に本村は「いいのかなあ」と困惑気味だったが、立ち往生も何だからと駐車場に向かつて歩き出した。鈴は本村の斜め後ろをついていく。

(あ、背がおっきい)

いつも遠くから眺めたり、話すにしても彼が体を屈かがめていたりしたせいで気付かなかったが、彼の身長は一八〇センチ以上ありそうだ。鈴が小柄なことも重なって、尚更大きく見えた。

緊張しつつも彼の車に乗り、着いた場所は本当にどこにでもありそうな居酒屋。知的な雰囲気が漂う本村がこんなところで飲んでいるのかとギャップに驚く。

「佐藤さんとよく来るんだ」

「佐藤係長もですか！」

佐藤といえば、本村の上司だ。社内きつての出世頭でもあり、城崎とは同期でライバルらしい。實力もさることながら、男性的な魅力を持つ城崎とは対照的に中性的な色気があって、皆が振り返るような美形としても有名だ。

非常にオシヤレなので、バーのカウンターで飲んでいるイメージがあるのに、こんな居酒屋に足を運ぶのか。

「あの人、どういう店でも平気で入れるんだよ」

人気者の意外な秘密。これを他の女子社員に話せば、店に張り込む人さえ出るかもしれない。そんなことを考えていると本村が先にのれんを潜る。鈴もその後が続いた。

「おお、本村じゃないか！」

二人で足を踏み入れたところで中から店の主人らしい人が顔を出した。

「どうも」

「珍しいな、女連れか」

主人は本村の背後に隠れる鈴を見て、たいそう大きな声でそう言った。鈴は「女連れ」という言葉に強張る。本村は自分の相談に乗ってくれようとしただけなのに誤解させては申し訳ない。

すると本村は笑いながら、「職場の後輩ですよ」とあつさり流した。主人も食い下がる気はないのだろう。「ゆっくりしていけ」と言い残し、店の奥に入っていく。

「この店主は高木さんといってね、俺や佐藤さんと同じ大学の先輩だったんだ。高木さん、座敷空いてるかな」

「おお、勝手に上がりな」

本村は「こつちだよ」と鈴を先導して、二階の座敷に入っていく。しかし、そこは個室同然の狭い空間。まさか居酒屋で二人きりになるとは思わず鈴は緊張してしまふ。

本村は気にも留めない様子でメニューを覗き込んでいた。

「原田さん、何か食べたいものはある？」

「えっと」

渡されたメニューに目を通すのだが、頭に入っていない。それに気付いたのだろうか、本村がメニューを指さし、「これとかおいしいよ」と勧めてきた。言われるままに頷いたところで、本村が立ち上がり、階下の主人に注文を伝える。

それを眺めつつも足を崩せず、ガチガチに固まった正座姿でじっとしていれば、注文を終えてこちらを振り返った本村が、

「あ、もしかしたら一階の、人がたくさんいる場所の方が良かったかな？」
と、尋ねてきた。

思っていただけに慌てると、

「込み入った話っぽかったから人に聞かれたくないかなと思つて座敷を選んだんだけど、変に緊張させる？ 何だつたら下に戻つてもいいよ？」

この気遣いは年の功なのだろうか。いや、だつたら城崎にも同じものがあっていいはず。この優しさはこの人の性格故に違う。

ジーンとしているところで、主人が料理と飲み物を持って現れた。いい香りに今までの緊張を忘れて鈴の腹が騒ぎ出す。

「とりあえず食べようか？」

そんな気持ちも察してくれたのか、本村の言葉に鈴は赤面しながら「そうですね」と同意した。

それから一時間経つた頃だろうか。先ほどまでの緊張はどこへやら。鈴は本村に絡んでいた。

「酷ひどいんですよ、そいつ！ お金、持ち逃げして、いくら貸したことか……っ」

普段ならあまり飲まない酒を景気づけに飲めば、完全な酔っぱらいの出来上がり。最初はテーブルを挟んで向かい合つて座っていたのに、気付けば本村の隣に腰かけメソメソ泣いている。

本村は特に意見を言うわけでもなく、鈴の話をうん、うん、と聞いていた。

「今まで付き合つた人たちも、どーしようもない人ばかりで！ 私が流されるのがいけないつてわかつてるんですけどお……」

「流される？」

「面倒見てるうちに雰囲気とかに流されちゃうんです……そんな気がないので。誘われたら断れ

ないというか……」

「あー、なるほどねえ……原田さん世話好きだもんね」

そう答えながら本村はウーロン茶をググツと飲んだ。彼は車だからと言つて酒を飲まない。そんなシラフの彼に、鈴は酒の勢いで思わず打ち明ける。

「エッチだつていつも自己本位なんですよ！」

本村がウーロン茶を吹き出した。だけど鈴は止まらない。

「嫌だつて言つても聞いてくれないし、それに痛いしっ。私嫌いなんです、抱かれるの。でも我慢して一生懸命やつたのに、別れ際にですよお、言われたんですよ！」

「……なんて？」

困惑気味の本村をギツと睨んで、鈴は拳をテーブルに叩きつける。

『この不感症女が』ってー！

そしてそのまま「わあ！」と泣き崩れた。

そう、元彼に言われて一番傷ついていたのはこの言葉だったりする。別に抱いてくださいとお願いしたわけでもないのに勝手に抱きまくつて、最後の最後にその言い草。

「大体どうして男の人つてすぐ体を求めるんですか。こっちは仕事で疲れてるのに都合も聞かず無理矢理押し倒して問答無用ですよ……！」

「……そ、そう……」

『』いいだろう？』とか言われても全然よくないんです！ でも『よくない』とか言つたら怒るし、

我慢してるしかなくて……」

「うん……」

「ムードもなければ色気もないっていうんでしょうか……何でホント男の人って……」

「まあ、そこは俺も男だから何とも言いがたいけれど……」

「気持ちいいとか思ったこと、一度もないですよお！」

「そこまで叫んで、鈴はピタリと止まった。」

「私、変なこと言ってますかね？」

目の据すわった鈴に本村は頬を掻きつつ、口を開く。

「いや、真剣に悩んでる話だから……おかしいとは思わないけど……」

「そうですね！」

今までの彼に対する不満の八割はそこにあっただけと言っても過言ではない。だが、こんな話を人に相談できるはずもなく、ずっと一人で抱え込んできたのだ。酒の力を借りて打ち明けてしまったことで制御が効かなくなった鈴は、こともあるうに情事の手順をはじめとして何から何まで話し出した。こうなるともう止まらない。

そして、話すことに必死だった鈴が、いつの間にか相づちさえ打たなくなった本村を見ると、彼は顔を赤らめて口を押さえていた。

視線を合わせてくれないのが不安で、鈴は注意を引くように本村の手に自分の手を重ねる。

「どう思いますか？」

それでも本村は鈴を直視せずに、視線を彷徨さまよわせて言った。

「……大変だなあ、と、思った」

途切れ途切れの言葉だったが、本村がしっかりと話を聞いてくれていたことに安堵し、鈴は手元にあつた酒をまた一口飲む。

「私だってドラマや漫画みたいにエッチして夢みたいに気持ちよくなれたらいいのになあ……。やっぱり不感症なんですか、私。わかってはいたんですけどね、エッチのときつまらなそうにしてるって」

今までの怒りが落ち込みへと変わり、肩を落とす鈴を見て、本村は眉間を押さえた。そこでしばらくの沈黙。

不意に、本村が鈴の手を掴んだ。

「主任？」

視線を送れば本村が真面目な表情で、

「じゃあ、俺としてみる？」

と問いかけてくる。

なにを？

首を傾げる鈴に本村が一言。

「セックス」

その瞬間、酔いが一気に引いていく感覚を鈴は味わった。

「君が付き合ってきた男よりかは多分上手くやれると思うんだけど」

思わず体が強張り、逃げようと身を引いたけれど、彼は手を放してくれない。

「しゅ、主任……」

「君が良ければ……」

どんなつもりでそんなことを言っているのか、鈴にはわからなかった。ただ、一滴も酒を飲んでいないというのに頬を紅潮させて、自分を見つめる本村の視線にぐらりと心が傾く。

「……精一杯、慰めるよ……」

恐ろしく甘い誘いに鈴の体が震え、肌が粟立った。流されちゃダメだと反省したばかりなのに、今までにないパターンの濁流に足下がすくわれていく。

その勢いに押されるように、ほとんど無心で鈴は小さくこくりと頷いた。返答に本村の方が驚き目を丸くしている。

だが彼は、まるで覚悟でも決めるように手元にあったウーロン茶を飲み干し、立ち上がった。

「……行こう」

伸ばされた手を取って立ち上がる。酔って足下がおぼつかない鈴の体を本村が支えてくれた。本村は高木に「ツケておいて」と声をかけてから店を出た。

「とりあえず、君の家まで送ろうか。案内できる？」

「はい」

車に乗りこんだところで、いつもと変わらず笑いかける本村に鈴が頷く。さっきのやりとりが嘘

のようだ。

同時に体から抜けていくアルコール。鈴は飲み屋での醜態しゆうたいをようやく自覚していった。死ぬほど恥ずかしい。叶うことなら、全てなかったことにしたい。

しかし、葛藤しているうちに、気付けば鈴のマンション前。

酔いが覚め始めたとはいえ、アルコールのせいで上手く歩けない鈴に本村が駆け寄り、体を支えてくれる。

「部屋は？」

「さ、三階です」

鈴の体を支えながら歩く本村は何も言わない。一歩ずつ確実に部屋は近づいている。このままでいいのだろうか。

しかし、思い悩むにはあまりにも短すぎる距離だった。目の前には、ドア。この先に自分の部屋がある。

鈴は動揺に震える手で、鍵を取り出す。

かちやり、と鍵が開く音がしたそのときだ。本村が鈴の体を支えたまま家の中に入り込み、突然背後から抱きしめてきた。

「しゅ、主任」

驚き振り向いたときには本村の顔が間近にあった。表情を確認するよりも早く押し当てられたのは、唇。その上、半開きになった唇から、彼の舌が入り込んできた。

「んっふう……」

普段の穏やかさからは想像もつかない激しいキスに、鈴の目尻に涙が浮かぶ。

「原田さん……っ」

普段はあまり話さない。まともな会話はきつと今日が初めてだ。なのに、何故この人はそんな熱っぽい目で自分を見てくるのだろう。

首筋を這う唇に鈴が溜息をこぼせば、彼が耳元で囁く。

「ベッドは？」

「お、奥の部屋です」

鈴が答えるやいなや、本村は鈴の体を軽々と抱き上げた。

「きゃっ」

そのまま彼は靴を脱いで、鈴の家に足を踏み入れる。鈴の履いたままのハイヒールが片方、リビングに落ちた。

暗い部屋を通り抜け、辿り着いた寝室。シングルベッドに鈴はどざりと下ろされる。スプリングが跳ねてギシギシという中、すぐさま覆い被さった影。

「主任……」

彼がもう片方の靴を脱がせて、頬に唇を寄せてくる。

どうしよう、と、今になって鈴は戸惑った。本当に抱かれてしまう。付き合っているわけでも、親しいわけでもない男の人に。

いつものことといえばそうだけど、彼は今まで鈴が付き合ってきた駄目な男たちとは違って、「普通」の人だ。このまま関係を持ってしまっていないのだろうか。

迷っていると、骨張った手に頬を押さえつけられキスをされた。濃厚なキスに唾液が零れ、喉を伝っていく。思考が奪われていく。

——おかしい。

男性経験は初めてではない。言ってしまったえば馴れてもいる。なのに、キス一つで翻弄されて、しかもこんなに気持ちいいなんて。

本村の手が鈴のスーツのボタンを外し、白いシャツの中に入り込んだ。大きな手は鈴の真っ白な腹を往復し、そのまま上へと移動する。

「あっ……」

胸の膨らみに触れられて、柔らかく揉まれただけで鈴は声を上げた。

「……どこが不感症なの……?」

本村の声が静かな部屋で小さく響く。シャツが彼の手で脱がされた。

「あっ……やあ……」

「こんなに可愛い声を上げているのに」

滑らせるように背中を回った手がブラジャーのホックを器用に外し、邪魔だと言わんばかりにどかした。小柄なわりにはそれなりにある乳房を彼は見下ろし息を呑む。そして体を屈めて、両手で包み込むように押し上げながら、乳房の先端に舌を這わせた。

「あつ、だ、だめ……っ」

上体を浮かせて彼を制しようとするのに、簡単に押さえつけられる。

「原田さん……」

「や、息がかかったら、くすぐりたいっ」

「……本当にどこが不感症なんだ」

そのまま悪戯に歯を立てられて、鈴は一層甲高い声を上げた。

今まで幾人もの男と付き合ってきたが、こんな甘い痺れは知らない。

いつも早く終わればいいと、天井ばかり見上げていたのに、今、この先を期待する自分がある。

「主任、お願いです、シャワー浴びさせて……」

観念した鈴が、今更ながらに訴えるが、

「ダメだ」

「だって……っ」

「そんなものあとでいい」

返ってきたのは急いたような男の声。

乳房をやわやわと揉みしだいていた手が、ヘソを通り太腿へと移動する。そして、スカートを捲り、手早くストッキングを脱がせてしまった。

器用な手が、長い指先が、鈴の秘所に触れる。途端、鈴は駆け抜けるような衝撃に喉をそらした。

「……すぐ濡れてる」

「やだ、そんな……」

下着越しに秘裂を往復する本村の指先。彼が言うように、これまではお情け程度にしか分泌されなかつた愛液が下着をぐっしりと濡らしている。

本村はスカートも脱がし、ベッドの下へ放り投げると、ショーツの中へ指を忍び込ませてきた。

「んああ……っ」

上がった甲高い声に鈴は驚いて口を押さえる。それに、本村は小さく笑って、鈴の両手を頭上に縫い止めた。もう一方の手は鈴の秘裂を割って体の中へと忍び込んでくる。

「ああっ……」

今まで出したことのない声に鈴は涙ぐんで拘束された手を動かしたが、離してもらえない。

「可愛いよ……」

ずず……と進入してくる長い指。それが、想像以上にすんなりと受け入れられていくのは、彼の言うとおりに鈴が感じて蜜を零しているからだ。中に入り込んだ指は探るように内壁を押し、そして小刻みに揺らされる。

合間に響く卑猥な水音。鈴は頭がどうにかなってしまっただった。

今まで付き合ってきた男性は全てが一方的で自己本位。鈴の表情なんか見もせずのことを進めたのに、本村は何かするたびに鈴の顔を観察してくる。そして気持ちのいい場所を見つけてはそこを執拗に攻めるのだ。

「あ……はあっ……」

一本だった指は二本になり、鈴の体から力が抜けていく。押さえつけられていた両手は解放されたが、口を押さええて声を堪える余裕なんてなく、シーツを掴むので精一杯だった。

本村は眼鏡を外すと鈴の足の付け根に顔を埋め、指の動きに合わせて滲み出す蜜を舐め上げる。時には嘔るようにして音を立てながら、いつまでたっても愛撫をやめない本村に鈴は呼吸を乱される。痺れるような快感が体を巡り始めていた。

「やだっ、なに……っ……怖いっ」

鈴の怯えたような声に本村は顔を上げると、蜜に濡れた自身の唇を舐め上げてから鈴の腕を取り、自分の首に誘導した。

間近で見つめ合う。本村が切なげな表情で鈴の唇を塞ぐ。口内を這う舌に鈴が翻弄される最中、本村が出し入れする指を一層激しく動かした。鈴は彼の首に回していた腕に力を込める。

「んっ！ つはあ……ああ……っ」

足先まで突き抜けるような衝撃と、震え。

その震えが生み出す波に鈴は堪えきれずに背を弓なりにそらした。

それを本村は眩しそうに見つめて、鈴の汗ばんだ前髪を掻き上げると額にキスする。

その所作一つ一つが優しい。

(どうしてこんなに優しくしてくれるの?)

同情だろうか、それとも気まぐれだろうか。

自分が誘ったも同然だが、これで遊びだと吐き捨てられたら、傷ついてしまいそうだ。

しかも同じ会社の人間、別部署とはいえ気まずい関係にはなりたくない。

朦朧とする頭でそんなことを考えていると、本村が体を起こして自分のスーツに手をかけた。

背広を脱ぎ、ネクタイをほどき、ワイシャツのボタンを外す。そんな仕草を見ていた鈴は、現れた彼の上半身に息を呑んだ。

本村はもう三十三歳。それなのに今まで付き合ったどんな男よりも体は引き締まっていて、少し筋肉質なくらいだ。

間近で見れば目は切れ長で瞳も長く、彫りの深い顔立ち。眼鏡がないせいだろうか、実際の年齢よりも若く見える。

鈴の視線を感じたのか彼は、「そんなにじっと見られたら恥ずかしいな」と苦笑した。

鈴が視線をそらせば、カチャリ、とベルトを外す音が聞こえる。ズボンのファスナーが下り、布がこすれる音に彼がストラックスを脱いだと悟って、顔を背けていても全てが見えるようだと思面した。

やがて全てを脱いだ本村が、鈴の視界に入らないように背後から近づきながら、

「ゴメン、避妊具持ってる?」

と問いかけてくる。

まさかここに来てそんな律儀な言葉を聞くとは思わず、目を丸くする鈴に、「ここ何年か女の人と付き合ってたから持ち合わせていなくて……」

と言った。

鈴は傍にある小さな戸棚に隠していた避妊具を取り出し、手渡す。彼はありがとうと呟き、それを破く。いよいよだ。

「……主任」

「うん？」

「どうして私のことを抱くんですか？」

思わず出た言葉に本村が瞬く。言った鈴は、泣き出したい気持ちになった。自分は何を期待しているのだろう。

人のいい本村を捕まえて愚痴を零しただけでも迷惑をかけているのに、その上、簡単に体を許している自分なんか軽蔑されてもいいくらじゃないか。それなのに、こんなことを聞いて、厚かましいにもほごがある。

本村はしばらく黙っていたが、目を細めて体を近づけると鈴の蜜壺に自身の猛りを押しつけた。

「……っ……」

そらしていた視線をやれば彼の大きく屹立したものが目に入る。鈴を気持ちよくするのに徹し、フェラも何もされていないのに怒張し昂ぶるそれは、鈴にとつてとても不思議なものに見えた。

「言ったら逃げそうだから、逃げられなくなつてから言うよ……」

低く掠れた声は、『女』というよりも『鈴本人』を求めているようだ。

そんなはずないと都合のいい願望を否定するように首を振ったところで、本村がゆっくりと押し入ってくる。

「んああ……っ！」

「……大丈夫……？」

「主任の、おっきい……っ」

「っ！」

氣遣いの言葉に見当違いな感想を述べれば本村が顔を真っ赤にした。

しかし、気を取り直したように鈴の彷徨う手を本村が取り、指を絡めてそのままシートの上にしつける。

本村の全てを呑み込んだ鈴が息を整えていると、本村がふいに言った。

「好きなんだ」

「……え」

生理的な涙が邪魔をして上手く開かなかった目をこれ以上なく開いて彼を見つめる。そこにあるのは熱っぽい、けれど、どこまでも真剣な眼差しだった。

「君が会社に入ったときからいいな、って思ってた……基山君つてに情報仕入れたりして」

本村がゆっくりと腰を引く。滑るように抜ける彼に鈴はまた声を上げて。

「ずっと狙ってた」

「うそ……っ」

「嘘じゃない、年甲斐もなく……ここ何年かは君に片思い、だ……」

その言葉で会話は終了とでも言うように本村が体を打ち込んできた。激しい律動に鈴の言葉も消

えてなくなる。十分に愛撫が施された体は本村を呑み込み啞え込んで、彼に吐息を作り出し、鈴の口からは嬌声を生み出した。

「ああっ、主任、主任……っ！」

受け身だった鈴もいつしか心地よさに彼の唇を求める。溶け込むような熱い時間。感じたことがないほどの快感に麻痺してしまいそうだ。

ただ、言葉や思考は消えても、本村が言ってくれた「好き」という言葉だけは何度も頭の中でリフレインされた。

「ああっ、だめ、だめ……本村主任！」

その快感が体を駆け抜けた瞬間、鈴の体が大きく跳ねる。

「……っ……」

本村は顎を引いて衝撃をやり過ぎす。彼が緊張したのを体で感じた。

「……っはあ……」

鈴は大きく息を吐く。肩を上下させて、涙を零して、まるで全速力で走ったときのように心臓がバクバクと打ち鳴っていた。消えない甘い痺れとまだ体に残る本村の猛りに鈴は彼を見つめ、目尻に溜まっていた涙をこぼす。

「本村……主任……」

自分でも聞いたことがないような甘い声に、本村がゴクリと唾を呑み込み、のど仏を上下させるのを見た。

鈴にはわからなかったのだ。自分が、彼を煽ってしまっていたなんて。

本村は体を乗り出して鈴の目尻を舐める。

「……原田さん、もっと欲しい」

「え……」

初めて情事の最中に達した鈴には、その先にまだ何かがあるなんて考えもしなかった。意味を理解できずに言葉を返せない鈴。その沈黙を、OKと取ったのか、本村が一旦自身を引き抜く。

「あんっ」

そして鈴の体を横に寝かせて、片足を持ち上げたかと思えば体を割り込ませた。

「……っ……や！」

まだ痺れの残る体を本村が無遠慮に打ち付けてくる。

「ああっ……っ！」

激しく、荒々しいくらいなのに一度達した体は怖くなるほど敏感に感じて。

「気持ちいい……っ？」

低く尋ねかけられた声にさえ体が反応する。

「可愛いよ……。原田さん……っ、原田さん……っ……やっつと、手が届いた……っ」

本村は鈴の体を抱きしめながら、嘯みしめるように繰り返す。鈴はそれを聞きながら彼が作り出す快感に溺れていくばかりだった。

温かい手が、頬に触れる。引き上げられるようにまじろみの世界から抜け出して、腫れぼったい
 瞼まぶたを開けようとしたところで、自分の髪を優しく撫でる感触に気が付いた。

「……目が覚めた？」

耳元で響いた、静かな男の声。顔を上げると、鈴を片腕に抱き、髪を撫でていた本村と目が合う。
 この現状が理解できず驚いて背中を向けてしまった鈴を、今度は背後から抱きしめながら、「酷ひどいな」
 と本村が笑った。

「可愛かったよ、すごく……」

そのまま首筋に唇が触れて、しっとり濡れたその場所に、本村がふっと息を吹きかける。思わず
 びくりと反応して怖々と振り返れば、彼は嬉しそうに目を細めた。

職場では眼鏡をかけ、髪も綺麗にまとめている彼だが、今は重なる視線を阻はむものもなく、髪も
 乱れ前髪が落ちている。だけどそれがかえって色っぽい。

(ホントに、本村主任とエッチしちゃったんだ……)

しかも、あんなに官能的なセックス、今まで一度もしたことがない。情事の後に、甘やかされる
 のも鈴にとっては初めてで、散々乱れた後で恥ずかしさもあつたが胸が満たされていく。

「……原田さん、俺と付き合わないか？」

「本村主任と……？」

そんな鈴に彼が笑みを消して、真剣な表情で尋ねてきた。中途半端に振り返り彼を見つめていた
 鈴が、それに驚き、体も彼の方へと向ける。向かい合わせになつたところで、本村は鈴の腰に腕を
 回した。

「年が離れてるから、嫌だつたりするかな」

「そ、そんなことはないんですが！ でもどうして」

「どうして？ あ、いや」

本村は今になつてどこか照れたような表情になる。

「だから、その、さっきも言ったけど原田さんのことずっと気になつてたから」

「ずっと……？」

「基山君と話している姿をよく見かけて、可愛いな、と思つてね……。いつも仕事を一生懸命やつ
 てるところにも好感を持ったというか。他にも理由はたくさんあるんだけど、とにかく原田さんが
 可愛くて仕方なかったんだ、俺は。でも原田さんいつも彼氏がいたし……」

言われてどうしようもない彼氏の姿を思い出す。

そして、昨日彼氏と別れたことをいつの間にか忘れていた自分に驚いた。

「それに城崎君と親しかったから」

「卑人へいじんにいますか？ 違うんです、あの人とは幼なじみで」

昔から縁がある城崎とは確かに親しいが、人に誤解されるような関係ではない。慌てて否定する鈴に、本村は、「うん、それも知ってるんだよ」と前置きしてから、

「それでも、親しいことには変わりないだろう？　なんだか近づきがたくてね、見ているばかりだった」

と言った。

鈴自身は本村を「いい人」だと認識し、それ以上の感情を抱いたことはなかった。なのに、本村はずっと前から鈴のことをそんな風に見てくれていたなんて。

「基山君に相談したら、今度彼氏と別れたとき、すぐにでも気持ちを伝えたらいいと言われたんだよね。原田さんが、その、いつもダメな男に引つかかっただけだから、心配してたみたいで」

基山は鈴に男ができるたびに、もつとまともな男と付き合いなさいよと言っていた。そんな彼女にとって本村は打って付けの相手にでも見えたのだろうか。

「実は知ってたんだよ。原田さんが彼氏と別れて一晩中泣いて出したこと。基山君に教えてもらって」

そういえば、男と別れた直後、基山にだけはいつもメールを送っていた。彼女は、「相手も馬鹿だけど鈴さんも馬鹿だよ」と冷静な意見をくれる。それがいつそ気持ちよくて、安心できるのだ。

今回も「別れた」メールに「仕方ないんだから。でも別れて正解だったと思うよ」と返事が返ってきていた。珍しく、「だけどきつと、いい人見つかるよ」なんて励ましも一緒に。

「陰でこそそして、それは申し訳ないと思ってる。でも、なかなか行動に出られなかった自分が

こんな風に言うのは格好悪いけど、本気だったんだ。だから今日こそ好きだと言うつもりで来たんだけど、店も居酒屋になっちゃったし、原田さん酔わせちゃったし……」

行き先が居酒屋に決定したとき、本村は困惑した表情を浮かべていた。もし、告白するつもりで誘ってくれたのなら、居酒屋なんてムードの欠片かけらもない。躊躇ちゅうちゆするのも当然だろう。

「そうしたら、原田さんの彼氏の話になって、聞いていたらなんか……こう、変に気が昂たかぶって」

それはそうだ。情事の手順から何から何まで話してしまったのだから。

「それからは気持ち先走ってちよつとわけがわからなくなってた」

そこで、本村が後悔するように息を吐く。しかしすぐに表情を整えた。

「原田さん。手順を大幅に間違ったけど……好きなのは本当なんだ。良ければ付き合ってくれないか？　君が俺のこと好きになってくれるよう努力するよ。返事は急がないから」

自分より九歳も年上の本村。そんな彼が年下の自分なんかに真剣な眼差しで告白してくる。

こんな真摯しんしんな告白を聞いたことが今まで一度もなかった鈴は感動してしまった。

手順は確かに滅茶苦茶だったけど、本村の想いは、愚痴に付き合ってくれた優しさや抱き合ったときに見た眼差しで実感している。

だから鍛きたえられたその胸板にこつりと額を寄せて。

「……私なんかでいいんですか？　馬鹿でいつも騙だまされてばっかりのどうしようもない人間なんですけど」

「ホントに？　いいの？」

「本村主任こそいいんですか……？」

「……いいよ、いいに決まってる。うわ、嬉しいな、ありがとう！」

受け入れる言葉に、年上の本村が一瞬子供のように無邪気に笑った。

今まで、酷い男とばかり付き合つて、好きになることもなく別れてしまっただけど、この人だったら本当に好きになることができるかもしれない。

温かな体温に包まれながら、鈴はひっそりとそう思った。

4

「……え、もうヤっちゃったの！」

翌週月曜日の休憩時間、本村と付き合うことになった旨を城崎、基山の二人に報告した鈴だったが、付き合うまでの経緯をダイジェストで説明したところ、社内であるにもかかわらず基山がストリートに、しかも大きな声でそう言った。

「と、知子さん、声大きい！」

基山知子は、絹のように光沢がある艶やかな黒髪と、人を射抜くような釣り上がった目をもったいかにも東洋人らしい迫力ある美人だ。そんな彼女は本村と同じ人事部に所属している。

本村から鈴のことを相談されていたらしいが、こんなにもことが速く動くとは考えていなかった

ようだ。

「お前……いくら押しに弱いからって、男と別れた翌日に別の男とつてどうなんだよ」

一緒に話を聞いていた城崎も呆れた様子で眉をひそめている。

「そ、そんなこと言つたって」

言い訳のしようがなく、しどろもどろになる鈴に、城崎は仕方のない奴だと言わんばかりに息を吐いた。

「でも今までの中じゃ一番まとも……じゃね？ てかい方じゃねーか、本村さんなら。なあ、基山」

「それは私だって同意見ですけど……。鈴さん、聞いたかもしれないけど私、本村さんの相談に乗つてたの。でもこんなにくすぐり行動に出るとは思わなかつたわ。仕事面ではニコニコ笑顔で話を押し切つたりすることあるんだけど、プライベートでもそうなのね」

「あの人、見かけによらねえとこあつしな。仕事ぶり見てもそれはわかる。デキるクセにやんなくて、それでも周りから反感買わないのつて、それなりの手腕があるからこそその芸当だと思つし。原田のことに関しちや、やつぱ本気で狙つてたんじゃねえの？」

何とも言えない表情で首を掻く城崎を横目に、鈴は照れを隠すように砂糖多めのコーヒを口に運ぶ。

「でも、お前いいのか、本村さんの年なら結婚前提じゃねえの？」

飲み込む直前に突然そんなことを言われて、鈴は大きく咽せ込んだ。

「うわ、汚ねえなあ！」

「あーあ、鈴さん大丈夫？ 城崎さん今狙って言ったでしょ？」

「あ、わかるか」

勢いよく城崎を睨み付けければ、「おー、怖」と全く怖がっている風もなく言っただけのける。

「まあ、賭だな。原田が幸せになれるかどうかのよ」

そして、お手並み拝見とばかりにニヤリと笑ったので、鈴はそんな城崎の態度にムツとしながら立ち上がった。

「私が先に結婚して子供が生まれたら、おじさんと呼ばれるんですからね、城崎さんは！ 余裕ぶって後で泣き見ても知りませんよ！」

「……なんだと！」

「じゃあ、失礼します、城崎のおじさん！」

「おいこら、鈴！」

書類を持って駆け出した鈴に城崎が声を上げる。基山は呆れたように「あーあ」と肩をすくめた。

休憩所から離れたところで鈴は一度だけ後方を一瞥すると、ふん、と鼻を鳴らし大股でずんずんと進んでいく。

本村と付き合うことに対して好意的な意見を言いながらも、城崎が内心「どうせ上手くいかないだろう」と思っていることが手に取るようにわかって腹立たしい。

確かにいつも、いつでも城崎の思うように上手くいかなかった。何度も、何度も泣いてきた。だ

けど、今回は、本村だけは……

「……落ちてるよ」

後方から声が響いた。ドキリとして振り返ると、今まさに考えていた本村の姿。視線を下に向ければ手の中にあると思っていた書類が全部廊下に落ちている。

いつの間にか落ちたのだ。

「……！ す、すみません！」

彼は笑いながら書類を拾い上げている。鈴も膝を曲げ、周囲にある書類を拾った。

どうしてこんな失敗ばかりしているのだろう。恥ずかしくて俯き気味だった鈴だが、チラリと彼に視線を送れば、嫌な顔一つせずに書類を拾っていた。そして、自分が拾った分の書類を鈴に手渡してくれる。その瞬間、鈴の指を本村の指が掠めた。

「あ」

一瞬緊張した鈴を見て、本村が含みのある笑いを浮かべる。

「じゃあ」

下を向いたせいかわずり落ちた眼鏡を上げながら呟かれた、簡単な別れの言葉。いつもと違うのは耳元で甘く囁かれたこと。驚いて耳を押さえれば、また書類が手元から落ちた。彼はクスクスと笑って、鈴の肩に手を置き立ち去っていく。

触れられた場所が熱い。

心臓はバクバクと打ち、今まで感じたことのない高揚感に鈴は甘い夜を思い出して、「わー……

っ！」とわめくと頬をパチパチ叩いた。

床に落とした書類をもう一度拾い直し、胸に抱えて立ち上がろうとするのだが、体に力が入らない。男性の行動で、こんなに動揺したり胸がドキドキしたことなんか、あっただろうか。

城崎や基山の話の聞いていると、意外と曲者くせものらしいのだが、それも追々おおいおい気付かされるのだろう。でも、本村に対して嫌だな、と思うところが出たとしても、嫌いにはなれない気がした。

鈴は一つ息を吸い込んで、歩き出す。

城崎が称した「賭」がどう転ぶか、それはきつと自分次第。しかし、この賭には勝ちたいと強く思うのは何故だろう。

原田鈴。先日彼氏と別れました。

その翌日、彼氏ができました。

どうなるかはわかりませんが、頑張ってみる所存です。

フリダシに戻ル

外ハネのショートボブにムースを馴染ませ、指先でいじる。生まれつき、緩いパーマがかかった鈴の髪は、動きに合わせて自在に変化していった。

しかし、鏡でそれを確認しながら、鈴はうーんと首を一捻り。

昔、髪を伸ばしたとき、男子に『メデューサのようだ』と言われ子供心に傷ついて以来、ずっとショートで通してきた鈴だが、最近、髪型で迷っている。

「本村さん、ロングの方が好きかなあ……」

理由は一ヶ月前から付き合うようになった九歳年上の恋人、本村武雄の存在。

鈴は傍にあつたファッション雑誌を取り、雑誌の中でふわふわと揺れるロングヘアに視線を落とした。

しかし、本村の顔を思い浮かべるや否や、あることを思い出し、表情が曇る。

こうなってしまうと、ヘアスタイルについては雲の向こう空の彼方。そのことばかり気になってしまってしまうがない。カーペットの上に体を倒した鈴は、眉間に寄った皺を撫でながら息を吐いた。実はここ最近、ある悩みを抱えている。

「原田さん、どこか行きたいところはある？」

「あ、えっと……私はどこでもいいです。本村さんは行きたいところとかないんですか？」

晴れた土曜日。休日ということもあり、二人で出かけることになった鈴と本村。走り出した車の中で行きたい場所を尋ねてきた本村に、鈴は曖昧な返事を返す。

「俺？ 俺は原田さんの行きたいところでもいいよ」

職場で見せるキツチリとしたスーツ姿とは一転し、Tシャツにジーンズというシンプルな服装に身を包んだ本村は、首もとから覗く鎖骨や、ハンドルを握る腕の逞しさが強調され、男性的な魅力が滲み出している。

しかし、ニコリと笑って決定権を委ねてくる本村に、鈴は内心「どうしよう」と頭を抱えた。行きたいところはたくさんある。

いい天気だから郊外にドライブへ行くのもいいし、気になる映画を二人で見るのもいいし、数日前テレビで見たホテルバイキングに行くのもいいし、何をしても楽しそうだ。

「私も本村さんが行きたいところでいいですよ？」

「あ、そんなものを全て呑み込んで、鈴は決定権を本村に委ね返す。」

「そう？ うーん、じゃあどこがいいかなあ」

鈴の遠慮に本村は困惑した様子でハンドルを指先で叩く。その表情に鈴は「しまった」と思い、「あ、